

趣意書

開明的だった薩摩藩は、幕末期（一八六五年）に国禁を犯して十九人の若き精鋭を英国に派遣しました。彼らは帰国後、「藩」という枠に捉われることなく、黎明期の近代国家日本建設の原動力となり大きな役割を担いました。

そして、鹿児島市は一八八二年三月、五十万都市となったことを記念して、西鹿児島駅（現鹿児島中央駅）前に、使節団を含むこの留学生たちの功績を称えるモニュメント「若き薩摩の群像」を建立しました。

このモニュメント建立をきっかけに、幕末から明治初期に於ける新生日本建設に貢献した薩摩藩英国留学生について、その活躍の詳細が市民に広く知られるところとなり、当時の薩摩藩の国際的視野に立った政策や、藩命に賛同し使命感に燃えた若き藩士たちの偉業に感銘感動し、市民は改めて自分たちの故郷鹿児島を誇りに思うようになりました。

ところが、このモニュメントには留学生ら十九人全員の像が建てられておらず、土佐出身の高見弥一と長崎出身の堀孝之の二人が入っていない、十七人の薩摩藩出身者のみのモニュメントになっています。もし、この二人が、単に「藩外者」という理由で外されたとしたら、誠に残念で悲しいことです。

高見弥一は、土佐藩を脱藩して薩摩藩に亡命し、薩摩藩士となって藩校「開成所」で学ぶ優秀な学生だった為、開成所の学生の中で英国派遣の人選を筆頭で受けました。帰国後も数学教師として五十三歳で亡くなるまで、土佐に戻ることもなく鹿児島の学校教育に尽力した人物です。

長崎出身とされている堀孝之は、代々、蘭学者として曾祖父の時代から薩摩藩に仕えていた藩士の子息です。当時、長崎で留学を構想していた五代才助（友厚）と懇意にしていた関係で、グラバー商会との留学手配の交渉などを手伝い、通訳として共に英国へ渡りました。また、一八六七年のパリ万博への薩摩藩参加の際にも、家老岩下方平らに同行し鹿児島を出発しています。帰国後は、藩の船奉行見習として長崎に赴きますが、後には五代と共に野に下り、関西経済界で活躍し、大きな功績を残しています。

このように、二人は藩の将来を囑望された俊才として人選され、藩費で英国に送り出されているうえ、帰国後の活躍ぶりも他の十七人に劣るとは思えないものです。

モニュメント建立から二十五年が経った今、私たち市民有志は、このモニュメントに、高見弥一と堀孝之の二人の像を追加建立する運動を起し、〈未完成〉とも言える「若き薩摩の群像」を改めて〈完成〉させるために「若き薩摩の群像を完成させる会」を発足させ、この趣旨を広く市民に訴えると共に、鹿児島市当局にその見直しを強く要望していく所存です。

九州新幹線が部分開通したことで、鹿児島中央駅を利用する観光客が以前にも増して増えている現実。また、二〇一一年に全線開通となることで一層の県外客訪問が見込まれています。駅に降り立った観光客が、最初に間近で目にし、見学するのは「若き薩摩の群像」であることは容易に予測できます。それら観光客に「何故、十七人しかいないのか？」と疑問を抱かせることがないよう、鹿児島市が襟度を示して、一日も早い〈完成〉が実現することを強く望むものであります。

平成十九年八月吉日

「若き薩摩の群像を完成させる会」

発起人代表 島津 修久

発起人（五十音順）

- 犬塚 孝明（「薩摩藩英国留学生」著者、鹿児島純心女子大学教授）
内村 八紘（薩摩藩英国留学生「名越兵馬」曾孫）
大山登規子（薩摩藩英国留学生「村橋久成」曾孫）
大西 洋逸（鹿児島県国際交流協会理事長、鹿児島商工会議所会頭）
小笠原 弦（薩摩藩英国留学生テレビ特番「黎明の群像」制作）
尾辻 義人（鹿児島日英協会会長）
門田 明（サンタローザ友好協会会長、県立鹿児島短期大学名誉教授）
川越 一路（薩摩藩英国留学生テレビ特番「黎明の群像」制作）
芳 即正（鹿児島県歴史資料センター黎明館史料編纂顧問）
古木 圭介（鹿児島日英協会常務理事、サンタローザ友好協会副会長）
五代 夏夫（作家）
才川 俊郎（KTS鹿児島テレビ元専務取締役）
齋藤 裕（かごしま久成会会長）
島津 修久（島津家三十二代当主、鹿児島経済同友会代表幹事）
豎山 博美（MBC南日本放送前会長）
田村 省三（尚古集成館館長）
原口 泉（鹿児島大学生涯教育研究センター長、法文学部教授）
山崎 利雄（KYT鹿児島読売テレビ元常務取締役）
山田 尚二（西郷南洲記念顕彰会常務理事）

事務局 小笠原 弦